自由遊び場面における幼児の非社会的遊びの変化

淡野将太・前田健一

The change of non-social play of preschool children in free play

Syota Tanno and Kenichi Maeda

Precedent studies concerning play and social behavior of preschool children had explored how preschool children change their play which accompanied with others. In the present study, the authors explored how preschool children change their non-social play which did not accompany with others from the view point what play the preschool children do next to the non-social play. As the result from the event sampling method, the number of the case of solitary passive play was significantly larger than that of reticent play. And the number of the change from the solitary passive play to play with others (i.e., other preschool children or caregiver) was larger than that from the solitary passive play to reticent play. These results suggested that in the case of the play with others were attractive, the preschool children finish their solitary passive play and start to play with others. Finally, the characteristics of the change of non-social play and the implications of non-social play for social adjustment were discussed.

キーワード：非社会的遊び，静的遊び，動的遊び，沈黙遊び，幼児
Key Words: non-social play, solitary passive play, solitary active play, reticent play, preschool children

問題と目的

非社会的遊び（nonsocial play）とは，共に遊ぶことができる相手がいる状況において行われる社会的相互作用の見られない遊びである（Coplan, 2000）。つまり，他者と関わらずにひとりで行う遊びである。

非社会的遊びに関するRubinの一連の研究（Coplan, Rubin, Fox, Calkins, & Stewart, 1994; Rubin, 1982; Rubin, Coplan, Fox, & Calkins, 1995; Rubin & Mills, 1988; Rubin, Watson, & Jambor, 1978）では，非社会的遊びは，静的遊び（solitary passive play），動的遊び（solitary active play），沈黙遊び（reticent play）の3種類に分類される。静的遊びは，積み木を組み立てたり絵を

描くなどの探索的で構成的な遊びに静かに取り組み，集団の中にいても孤独を好み，他者の遊びには関心を向けることがないのが特徴である。自由遊びの中で観察される割合は約 25%から 45%であり，幼児期の自由遊びにおいて多く見られる遊びである。動的遊びは，積み木などのブロックどうしをぶつけたり人形を動かすなどの機能的で劇的な遊びであり，仲間から拒否された場合に生じやすいことが特徴である。自由遊びの中で観察される割合は非常に稀で，約 2%から 3%である。沈黙遊びは，他人の遊びを見つめたり教室内をうろうろする傍観者的な遊びであり，他の幼児への接近と回避の葛藤を経験している場合に行うことが多いとされる。自由遊びの中で観察される割合は 10%から 15%である（Rubin & Mills, 1988; Rubin et al., 1978）。

幼児期における他者との相互作用が子どもの発達にとって重要な役割を果たすことは，古くから指摘されてきた（Hartup, 1983; Hymel & Rubin, 1985）。非社会的遊びは，ひとりで行う他者との相互作用を伴わない遊びであり，他者との相互作用を伴う遊びと比較して不適応的であると見られやすい。そのため，幼児の非社会的遊びに関する研究は，非社会的遊びと社会的適応性との関連に焦点を当てて検討してきた（Coplan et al., 1994; Coplan, Gavinski-Molina, Lagace-Seguin, & Whichmann, 2001; 大内・桜井, 2005; Spinrad, Eisenberg, Harris, Hanish, Fabes, Kupanoff, Ringwald, & Holmes, 2004; Rubin, 1982）。しかし，これらの研究は，非社会的遊びの全てが，必ずしも不適応と正の関連があるわけではないことを指摘している。例えば大内・桜井（2005）は，就学前児における非社会的遊びと社会的適応性との関連を検討した結果，沈黙遊びを多く示す幼児は，他者と協同作業を行ったり他者に従順な傾向があり，社会的に適応的であることを見出している。一方，動的遊びを多く示す幼児は，他者の行動への興味および社会参加が少なく，怒り・反抗的態度と無関心・引っ込み思案という 2 つの問題行動を示す傾向にあり，社会的に不適応であることが示された。また，静的遊びと社会的適応性の間には関連が見られなかった。

幼児の遊びに関する研究では，相互作用場面における仲間への働きかけ（松井, 2001; 松井・無藤・門山, 2001）や，集団への仲間入り方略（倉持, 1994; 渋谷, 2000）の観点から研究が行われている。これらの研究は，他の幼児との相互作用を伴う遊びがどのように変化するかに注目している点で一致している。一方，非社会的遊びの変化について検討した研究は未だに行われていない。非社会的遊びと社会的適応性との関連が指摘される中，非社会的遊びがどのように変化するのかを検討することは重要であると考えられる。

そこで本研究では，非社会的遊びの変化について，自由遊び場面の自然観察によって検討する。観察は次のような観点から行う。すなわち，自由遊び場面において非社会的遊びに従事している幼児が，その非社会的遊びの次にどのような遊びを行うのか，という観点から検討する。観察方法には，イベントサンプリング法を用いる。従来の非社会的遊び研究では，主として一定の時間間隔によって 1 インターバルを設定するタイムサンプリング法が用いられてきた。しかし，タイムサンプリング法では，非社会的遊びを非連続的にしか捉えることができず，その変化を検討することができない。そこで本研究では，観察される状況や遊びの統合性を維持することが可能であり，対象とする遊びの生起要因や経過が詳細に把握することが可能なイベントサンプリング法を用いて観察を行う。

方　法

対象児

観察は，広島県内にある幼稚園で行った。観察の対象児は，3歳児1クラス20名，4歳児1クラス35名を対象に行った。5歳児クラスは，予備観察において他者との相互作用を行う遊びが多く確認されたため，観察対象からは除外した。

観察方法

先述の通り，観察の対象児を限定せず，非社会的遊びを行っている幼児が確認できたところでその幼児を観察対象児とするイベントサンプリング法を用いた。非社会的遊びであると確認できた遊びを1事例とし，その事例の中において非社会的遊びが変化した時点で観察を終了した。観察は，保育に参加しない“観察者”の立場を取り，自由遊びの時間に自然観察を行った。非社会的遊びの分類に関しては，Coplan et al.（1994）の非社会的遊びの定義を参考に，著者らが分類を行った。

観察時期

観察は，3歳児，4歳児ともに，2006年4月から2006年7月に行った。観察頻度は1週間に1回，1ヶ月に3回程度であり，観察時間は毎回約90分であった。その中で得られた観察記録を分析の対象とした。

結　果

自由遊び場面における非社会的遊びの事例数

イベントサンプリング法によって観察された，自由遊び場面における幼児の非社会的遊びの事例数は，静的遊び21事例，沈黙遊び6事例，合計27事例であった。また，動的遊びは確認されなかった。非社会的遊びの事例数の差を検討するため，静的遊びと沈黙遊びの事例数についてχ^2検定を行った結果，静的遊びの事例数が有意に多かった（$\chi^2(26) = 8.33, p < .01$）。

非社会的遊びの変化

観察された非社会的遊び27事例について，非社会的遊びの次に行われた遊びについて分類を行ったところ，非社会的遊びから他の非社会的遊びへの変化（i.e., 静的遊びから沈黙遊びへの変化および沈黙遊びから静的遊びへの変化）事例と非社会的遊びから他者との遊びへの変化（i.e., 他の幼児との遊びへの変化および保育者との遊びへの変化）事例が確認された。非社会的遊びと次に行われた遊びの事例数をTABLE 1に示す。

(1) 静的遊びからの変化　静的遊びから他者との遊びへの変化事例数は17事例，静的遊びから沈黙遊びへの変化事例数は4事例であった。静的遊びからの変化事例数の差を検討するため，静的遊びから他者との遊びへの変化事例数と静的遊びから沈黙遊びへの変化事例数についてχ^2検定を行った結果，静的遊びから他者との遊びへの変化事例数が有意に多かった（$\chi^2(20) = 8.10, p < .01$）。また，静的遊びから動的遊びへの変化は確認されなかった。

(2) 沈黙遊びからの変化　沈黙遊びから他者との遊びへの変化事例数は4事例，沈黙遊びから

静的遊びへの変化事例数は2事例であった。沈黙遊びからの変化事例数の差を検討するため，沈黙遊びから他者との遊びへの変化事例数と沈黙遊びから静的遊びへの変化事例数について χ^2 検定を行った結果，両事例数の間に有意な差は見られなかった（$\chi^2(5) = 0.67$, *n.s.*）。また，沈黙遊びから動的遊びへの変化は確認されなかった。

(3) 非社会的遊び（静的遊びおよび沈黙遊び）からの変化　静的遊びおよび沈黙遊びを非社会的遊びに統一し，非社会的遊びからの遊びの変化事例数を検討した。非社会的遊びから他者との遊びへの変化事例数は21事例，非社会的から別の非社会的遊びへの変化事例数は6事例であった。非社会的遊びからの変化事例数の差を検討するため，非社会的遊びから他者との遊びへの変化事例数と非社会的遊びから他の非社会的遊びへの変化事例数について χ^2 検定を行った結果，非社会的遊びから他者との遊びへの変化事例数が有意に多かった（$\chi^2(26) = 8.33$, $p < .01$）。

TABLE 1　非社会的遊びと次に行われた遊びの事例数

	静的遊びへの変化	沈黙遊びへの変化	他者との相互作用への変化	合計
静的遊び	—	4	17	21
沈黙遊び	2	—	4	6
合計	2	4	21	27

非社会的遊びの変化の事例

非社会的遊びの変化の事例を以下に示す。

事例1：静的遊びから他者との遊びへの変化（年少児）　男児Aが本棚から乗り物の本を取り，教室の中央にあるテーブルの上で読み始める（静的遊び）。男児Aが本を読んでいる隣に男児Bがやってきて，本棚から持ってきた生き物の本を読み始める。男児Bはすぐにその本を閉じて読むのを止め，本を読んでいる男児Aの方を見る。男児Bは男児Aのすぐ傍まで近づいて，男児Aと一緒に乗り物の本を読み始める。男児Aは男児Bに関心を示さず，本を読み続ける。その後，男児Aは本を読み終え，電車のおもちゃで遊び始める。男児Bはそれにはついてこない。男児Aは線路をたくさんつなぎ合わせて電車を走らせる。男児Aが電車で遊んでいるところに女児Cが近づき，電車で遊ぶために男児Aの電車をつかむ。男児Aと女児Cで電車の取り合いになるが，けんかにはならず，男児Aは電車での遊びを続ける。男児Aはそばを通った保育者に自分がつなげた電車を見せて，「クネクネしてるよ」と声をかける。保育者は「クネクネしてるね」とこたえる。男児Aと保育者は電車での遊びを継続させる（他者との遊び）。

事例2：静的遊びから沈黙遊びへの変化（年中児）　女児Dが教室の角にあるテーブルの上でおりがみを折って遊んでいる。テーブルの上でおりがみをしている幼児は他にもいる。ふたりで一緒におりがみをする幼児もいたが，女児Dはひとりでおりがみをしている（静的遊び）。女児Dはおりがみで作ったあひるを手に取り，そのあひるにテープでストローを取り付ける。その後，女児Dはストローを取り付けたおりがみのあひるを持って，教室を歩きまわる。女児Dは教室を歩きまわった後，教室から出て隣の遊戯室に入る。女児Dに他の女児が話かけるが，女児Dはそれにかまわずに遊戯室を歩きまわる。遊戯室をあるきまわった後，遊戯室から出て隣の多目的室に入る。多

目的室でも歩きまわる（沈黙遊び）。

事例 3：沈黙遊びから他者との遊びへの変化（年少児）　男児 E が教室の中央にあるテーブルの横に座っている。男児 E は座ったまま何もせず，教室内を走りまわっている他の園児や，テーブルの上で工作をして遊んでいる園児を見ている。その後，男児 E は立ち上がり，教室内を歩きまわる。男児 E は教室内を走りまわっている他の園児とは関わらず，教室のスペースを約 4 分間歩きまわる（沈黙遊び）。教室に保育者が入ってきて，「外に行こう」と男児 E や他の園児に声をかける。男児 E は保育者に付いて歩き，教室の外で保育者と遊ぶ（他者との遊び）。

事例 4：沈黙遊びから静的遊びへの変化（年少児）　女児 F が，教室中央にあるカタツムリの入ったバケツの傍に座っている。女児 F はカタツムリを見るのを止め，カタツムリの入っているバケツのまわりを歩きはじめる。バケツのまわりには，保育者の他に園児が 2 人いる。女児 F は保育者および 2 人の園児には関わらず，バケツのまわりを歩く。保育者がバケツのまわりからいなくなるが，女児 F は保育者の移動は気にせず，バケツのまわりを歩き続ける。約 3 分後，女児 F はバケツのまわりから離れ，教室のスペースに座る。女児 F は座ったまま，まわりを見まわしたり，カタツムリが入っているバケツの方を見たりする。その後女児 F は立ち上がり，再びカタツムリの入っているバケツのまわりを歩く（沈黙遊び）。その後，女児 F は教室の窓のところにいた保育者に近づき，棚に入っているおどうぐばこを取ってもらう。そして，女児 F はおりがみで工作をはじめる（静的遊び）。

考　察

本研究では，幼児の非社会的遊びの変化について，非社会的遊びに従事している幼児が，その非社会的遊びの次にどのような遊びを行うのか，という観点から検討を行った。観察方法は，観察される状況や遊びの統合性を維持することが可能であり，対象とする遊びの生起要因や経過が詳細に把握することが可能なイベントサンプリング法を用いた。ここでは，非社会的遊びの変化の特徴と今後の課題について考察する。

本研究で観察された非社会的遊びの事例数は 27 事例であり，静的遊びの事例数（21 事例）が沈黙遊びの事例数（6 事例）と比較して有意に多く，動的遊びは確認されなかった。これらの結果は，静的遊びは幼児期の自由遊びにおいて多く見られる遊びであるという知見（Coplan, 2000; Rubin et al., 1978）および動的遊びは幼児期の自由遊びにおいてほとんどみられないという知見（Coplan et al., 2001; Spinrad et al., 2004）と一致する結果であった。また，非社会的遊び（i.e., 静的遊びおよび沈黙遊び）から動的遊びへの変化事例は確認されず，非社会的遊びからの変化においても動的遊びは見られないことが明らかとなった。

大内・桜井（2005）は，静的遊びに従事する幼児は，社会的接触を持たずにひとりで遊ぶことに満足するが，もし魅力的な社会的勧誘があれば，社会的な活動にも喜んで参加する可能性があることを指摘している。本研究では，静的遊びの次に行われた遊びは，静的遊びから他者との遊びへの変化事例数が沈黙遊びへの変化事例数よりも有意に多かった。この結果は，大内・桜井（2005）の

指摘と同様に，他者との遊びが魅力的である場合は静的遊びを終了し，他者との遊びに従事することを示唆している。

最後に今後の課題について考察する。本研究では屋内において観察を行ったが，屋外においても観察を行う必要がある。廣瀬・日野林・南（2006）は，物理的環境が大きく異なる幼稚園内の屋内と屋外というふたつの遊び場面において，幼児の交渉相手数，および交渉相手の多様性について比較検討している。その結果，幼児の遊び相手は場面の違いによって影響を受けること，すなわち，物理的環境は幼児の遊び相手に影響を及ぼし，その影響は年齢によって異なることが示された。

幼児の遊び相手が遊ぶ環境が屋内か屋外かという場面の違いによって影響を受けるということは，他者との相互作用の形態も場面の違いによって影響を受けることを示し，非社会的遊びに従事する機会も場面の違いによって影響をうけることを示唆している。そのため，屋内と屋外における非社会的遊びの違いについても今後検討する必要があるだろう。

また，幼児が従事している非社会的遊びがどのような文脈において行われているのかについて詳細に検討を行う必要がある。タイムサンプリング法では，遊びと遊びの間の移動が沈黙遊びとして見なされる可能性がある。例えば，幼児が積み木で遊ぶため，教室内の積み木置き場まで歩いていても，この行動は沈黙遊びと見なされる。Coplan et al.（1994）は，沈黙遊びの特徴として見られる歩き回る行動は，無目的（aimless）であることを定義として指摘している。そのため，幼児の行動がどのような文脈から生起したのかを考慮する必要がある。例えば，本研究の事例 3 では，男児 E は教室内のスペースを約 4 分間歩き回っており，時間の長さから移動ではなく沈黙遊びであることが分かる。そのため，幼児がその行動に従事している時間を非社会的遊びの分類に取り入れることも有益である。

さらに，社会的適応性の個人差を考慮し，社会的に不適応な幼児の非社会的遊びの特徴を検討していく必要もある。本研究では，非社会的遊びに従事している間に，他者からの働きかけがあるにも関わらず非社会的遊びを継続する事例が確認されている（e.g., 事例 1)。非社会的遊びに従事している幼児は，社会的スキルが欠如しているために他者との相互作用を行うことができず，結果として孤立し，非社会的遊びに従事している可能性もある。今後，社会的に不適応な幼児への介入を考える際には，その幼児の非社会的遊びの特徴を記述し，幼児の社会的スキルの改善を試みることで社会的適応性を向上させることも可能になるだろう。

引用文献

Coplan, R. J. (2000). Assessing nonsocial play in early childhood: Conceptual and methodological approaches. In K. Gitlin-Weiner, A. Sandgrund & C. Schaefer (Eds.), *Play diagnosis and assessment* (2nd ed., pp. 563-598). New York: Wiley.

Coplan, R. J., Gavinski-Molina, M. H., Lagace-Seguin, D. G., & Whichmann, C. (2001). When girls versus boys play alone: Nonsocial play and adjustment in kindergarten. *Developmental Psychology*, 37, 464-474.

Coplan, R. J., Rubin, K. H., Fox, N. A., Calkins, S. D., & Stewart, S. L. (1994). Being alone, playing alone, and acting alone: Distinguishing among reticence and passive and active solitude in young children. *Child Development*, **65**, 129-137.

Hartup, W. W. (1983). Peer interactions. In E. M. Hetherington (Ed.) & P. H. Mussen (Series Ed.), *Handbook of child psychology. Vol. 4. Socialization, personality, and social development.* (4th ed., pp. 103-196). New York: Wiley.

廣瀬康弘・日野林俊彦・南　徹弘 (2006). 幼稚園の屋内と屋外の遊び場面における幼児の仲間関係 心理学研究, **77**, 40-47.

Hymel, S., & Rubin, K. H. (1985). Children with peer relationship and social skills problems: Conceptual, methodological, and developmental issues. In G. J. Whitehurst (Ed.), *Annals of child development.* Vol.2, Greenwich: JAI Press. pp. 251-297.

倉持清美 (1994). 就学前児の遊び集団への仲間入り過程　発達心理学研究, **5**, 137-144.

松井愛奈 (2001). 幼児の仲間への働きかけと遊び場面との関連　教育心理学研究, **49**, 285-294.

松井愛奈・無藤　隆・門山　睦 (2001). 幼児の仲間との相互作用のきっかけ：幼稚園における自由遊び場面の検討　発達心理学研究, **12**, 195-205.

大内晶子・桜井茂男 (2005). 就学前児における非社会的遊びと社会的適応との関連　筑波心理学研究, **30**, 51-61.

Rubin, K. H. (1982). Nonsocial play in preschoolers: Necessary evil? *Child Development,* **53**, 651-657.

Rubin, K. H., Coplan, R. J., Fox, N. A., & Calkins, S. D. (1995). Emotionality, emotion regulation, and preschoolers' social adaptation. *Development and Psychopathology,* **7**, 49-62.

Rubin, K. H., & Mills, R. S. L. (1988). The many faces of social isolation in childhood. *Journal of Consulting and Clinical Psychology,* **6**, 916-924.

Rubin, K. H., Watson, K. S., & Jambor, T. W. (1978). Free-play behaviors in preschool and kindergarten children. *Child Development,* **49**, 534-536.

渋谷キミエ (2000). 子どもの仲間入り方略に関する生態観察：仲間入り行動における相互作用のプロセス 発達研究, **15**, 131-143.

Spinrad, T. L., Eisenberg, N., Harris, E., Hanish, L., Fabes, R. A., Kupanoff, K., Ringwald, S., & Holmes, J. (2004). The relation of children's everyday nonsocial peer play behavior to their emotionality, regulation, and social functioning. *Developmental Psychology,* **40**, 67-80.